

弦楽器の歴史

青山 俊一

ここで述べるのはヴァイオリン、ヴィオラ、チェロ、コントラバスなど、弓で弾くオーケストラの弦楽器が現在の姿になるまでの歴史です。

参考資料は「ヴァイオリンの名器」(フランツ・ファルガ著 1960 音楽之友社)です。この本にはヴァイオリン製作者のエピソードなどが歴史小説のような趣で書かれていて、ヴァイオリン愛好家にはとても面白い内容です。その最初の章にヴァイオリンが今日の姿になるまでの歴史が書かれていますので、ここではその内容を基に、弦楽器の歴史を解かり易くまとめました。

1. ヴァイオリンの起源はアジア

哲学、詩、彫刻、建築、音楽理論の先駆者である古代ギリシャ人は、歌や詩の朗読の効果を強めるために、共鳴箱の上に弦を一本張って指でかき鳴らすリラという楽器を使っていたが、弓は知らなかった。

弓を最初に使ったのはインド、ペルシャ等の馬を家畜としていたアジア民族で、馬の尾毛は現在でも弓の毛に最も適している。弓によって音楽表現の可能性が広がり、言葉が無くても聴き手の気分を高めたり、和らげることが出来る。

古代ペルシャのケマンジェ (図 1) は弦を指で押さえて音の高低を調整した (指板はまだ無い)。弓は引かずに弦に押し付け、楽器を動かして音を出す弾き方であった。



図 1 ケマンジェ

2. アジアから西洋へ

アラビアのレバブ (図 2) は一段と進歩したもので、共鳴箱が初めて台形になり、指板がある。ムーア人がスペインに侵入した時、この楽器はレベックという名で西洋にはじめて紹介された。この楽器はさらに進歩した形となり、バラ形の共鳴孔が二つ見られる (図 3)。アジアでは楽器を床に置き、座って弓の方向を変えずに楽器を振り動かして演奏していた。この振り動かす運動をこの時代のドイツ語では geigan と言っている。



図 2 アラビアのレバブ



図 3 ムーア人のレベック

これが geigen (ヴァイオリンを弾く) という言葉の語源と言われている (ヴァイオリンでは弓を動かすので反対ではあるが)。しかし、ドイツ人はアジア人の弾き方に親しめず、立って弾けるように胴体を細く、湾曲を深くし、指板を扱いやすい形にした。このようにして当時の絵 (図 4) に見られるように、多くのフィーデル (擦弦楽器の総称) の変種が生まれた。



図 4 当時のフィーデル

3. イタリアでの発展

音楽の愛好国イタリアは、13世紀初頭まで弓を使う楽器を知らなかった。これは不思議であるが、イタリア人はドイツやフランスから輸入された楽器をモデルにして、さらに様々な

変種を製作した。そのような試行錯誤が17世紀の中ごろまで300年以上続いた後に、比類のない傑作を数多く生み出したのである。

この時期の楽器の形は多種多様であり、色々な大きさのものが作られた。当時のイタリアのヴィオラ・ダ・ブラッチョ（現在のヴィオラの前身：図5A）には弦が6本ついていた。またチェロの前身であるヴィオラ・ダ・ガンバ（図5B）も色々な大きさのものが作られ、弦も5〜7本あった。現在のコントラバスの前身（図5C）はヴィオローネと呼ばれていた（弦は6本）。図5Dはバリトンであり、6本の弦の他に44本の共鳴弦がついている。音は柔らかく快かったが、共鳴弦が少し耳障りな音を出した。そのためヴァイオリンが出現すると、次第に忘れ去られてしまった。図5Eは現在のチェロに近い形のヴィオラ・ダ・ガンバである。（図5の各楽器の大きさはわからない）

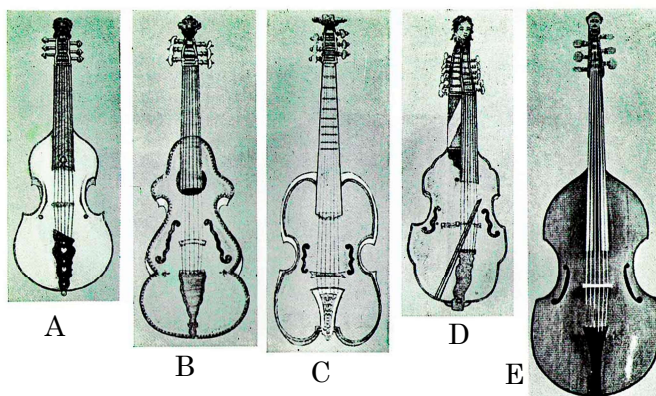


図5 生み出された多種多様な変種

4. ヴァイオリンの誕生

誰が最初に今日の形のヴァイオリンを作ったかは不明であるが、おそらく無数の製作者たちが試行を重ねて土台を作り上げ、それに基づいてヴァイオリンが完成されたと考えるのが正しいと思われる。現在わずかに楽器が残っているガスパーロ・ダ・サロはそのような製作者の一人であり、その弟子のアマティ家の初代「アンドレア・アマティ」が16世紀半ばにクレモナにヴァイオリン工房を開設した。彼は裕福であり、その富を活用してヴァイオリンに適した良質の木材や、ニス配合に必要な原料を大量に手に入れ、数多くのヴァイオリンを製作している。アンドレア・アマティのヴァイオリン（図6）は表板の隆起が非常に高いのが特徴で、音量は大きくはなかったが、柔らかい澄んだ音が出た。



図6 アンドレア・アマティのヴァイオリン

5. 巨匠ストラディヴァリ

クレモナが生んだ最大のヴァイオリン製作家、ストラディヴァリ（図7）は魔術師であった。彼の秘法は今なお誰も探り当てることが出来ない。彼の師匠はニコラ・アマティ（アンドレアの孫）である。ストラディヴァリは仕事をこよなく愛し、疲れを知らない研究者でもあった。ヴァイオリンの効果的な木の厚さを追究して、無数の試作を行うなど、改良に没頭した。このような努力により、18世紀の初めには理想を実現して、その後の全盛期には独自のヴァイオリンを多数製作した。これらのヴァイオリンはオーケストラとの協演

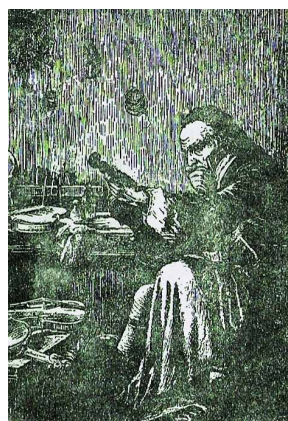


図7 巨匠ストラディヴァリ

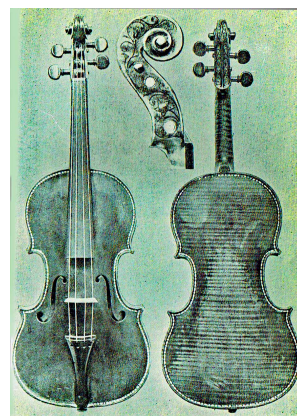


図8 ストラディヴァリの最高傑作グレフューレ

の際にも堂々とそれに太刀打ちできる音量があり、また極めて多様なニュアンスを持ち、その息のようなピアニッシモは大きな会場でも、くまなく音を通る。完璧な演奏会用ヴァイオリン（図 8）が完成したのである。彼は生涯に 2000 本のヴァイオリンを製作し、そのうち 1000 本は現存していると言われている。

6. ヴァイオリンを弾く弓について

最初の弓は両端に穴をあけ、それに毛を結んだ棒に過ぎなかった（図 1）。漸く弓らしい形となったのは 15 世紀であり、弓先と毛止めの構造ができたが、ネジを用いて弓の毛の張り具合を調整する機能は、それから 2 世紀後に現れている（図 9）。その後、運弓技術に新しい道を開いたタルティーニ等により、弓の進化が促され、弓身が平らで先が急に曲がる形になっていった。今日の弓の形はヴィオッティの考案によるものである。弓身はまっすぐになり、弾力性に富んだ構造となった。これにより、スピッカート（細かい音符を弦の上で弓を跳ねさせて弾く奏法）のような難度の高い奏法も、一般的に用いられるようになった。軽量で強い弾力を持たせるため、弓身の材料としては、強靱なブラジル産のフェルナンブーコ材が最適とされている。今日、優れた奏者は、その技量に相応しいヴァイオリンだけでなく、その能力を最大限に引き出せる弓を使っている。

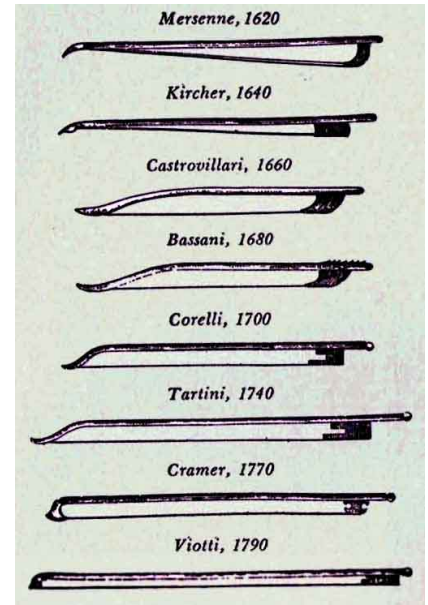


図 9 弓の構造改良

7. おわりに

弦楽器の歴史について、参考資料「ヴァイオリンの名器」を基に、主にヴァイオリンの起源から現在の形に至るまでの進化を、駆け足で説明させて頂きました。

私はこの「ヴァイオリンの名器」の本に数十年前に出会い、繰り返し愛読するうちに、イタリアのオールドヴァイオリンの魅力にすっかり憑りつかれました。最近、幸運にもストラディヴァリ、グァダニーニの名器を弾く機会がありましたが、ヴァイオリンの歴史のロマンが走馬灯のように頭を駆け巡り、まさに至福のひと時となりました。魂を奪われるような音色はもとより、音の立ち上がり（反応）が素晴らしく、それを肌で感じられたのが醍醐味でした。

弦楽器の発明・発展により、数多くのオーケストラの名曲も生まれたわけですので、その意義深さを改めて感じています。